

7. 摂食障害患者の治療構造の選択について

岡村斉恵, 福留和美, 古関啓二郎
(松戸市立・心療精神)
武田直己 (千大)

思春期の摂食障害の2例を報告し, 治療構造の選択について, 発達という視点から考察した。思春期に長期の治療が行われる場合, 母子関係や本人の内的世界の変化を考慮し, 発達段階に合わせて適当な治療構造を選択し, 構造を変更することも必要である。

8. 脳内石灰化を伴い, 痙性対麻痺, パーキンソニズムと痴呆を認めた1例—diffuse neurofibrillary tangles with calcificationとの関連

吉野美幸, 鈴木浩二, 畠山治子
宗像 紳, 南雲清美, 小島重幸
(松戸市立・神内)

画像上, 脳内の石灰化と脳萎縮を認め, 痙性対麻痺, パーキンソニズムとともに痴呆を呈した58歳女性を報告し, DNTCとの関連について臨床的に検討を加えた。

9. 当院における Risperidone の使用について

竹田修志, 須山 章, 藤崎美久
宮城島大, 渡辺啓治, 土屋伸子
(三芳病院)

近年, 臨床に登場した Risperidone について, 当院におけるその使用状況 (年齢・性別), 効果, 副作用を報告し, 薬剤の使用方法について検討した。Risperidone は錐体外路系の副作用が少ないことが特徴であり, 多剤併用にてその利点が減弱してしまう可能性があると思われた。

10. 外国人精神障害患者に対する入院治療例の検討

古田多真美, 中居 香, 斎賀孝久
佐竹直子, 佐藤茂樹 (成田赤十字)

当院精神科において入院治療を行った外国人42名の傾向と治療対応について検討した。成田空港経由による入院が6割を占め, 急性一過性精神病障害と診断される例が約半数であった。出稼ぎを中心とした長期滞在者群が約6割であるが, 非合法滞在も多く, 帰国援助に困難を生じる例が散見された。

11. 覚せい剤精神病の再発脆弱性におけるGタンパク質介在伝達系の変化の意義—第2報: G protein $\beta\gamma$ サブユニットおよび効果器系について—

菊池周一, 佐藤美緒, 尾崎 茂
和田 清 (国立精神保健研究所)
岩佐博人 (千大)

メタンフェタミンによる逆耐性形成におけるG $\beta\gamma$ を介する伝達系の意義を明らかにするため, G $\beta 1$, $\gamma 3$, GIRK1の蛋白質発現の変動を検討した。その結果, 腹側被蓋野におけるG $\beta 1$ および前頭前野におけるGIRK1の変化が逆耐性の維持機構に重要であることが明らかになった。

12. 覚せい剤精神病の再発脆弱性におけるGタンパク質介在伝達系の変化の意義—第3報: 低分子量Gタンパク質 Ras の関与—

佐藤美緒, 菊池周一, 平岩智瑞
尾崎 茂, 和田 清
(国立精神保健研究所)

メタンフェタミン (METH) による逆耐性形成においてG蛋白質 $\beta\gamma$ の変化による効果器系の影響を検索するため, MAP kinase系におけるRasタンパクの発現を検討した。その結果, 逆耐性形成の有無に関わらずMETHチャレンジに反応してRasタンパクの発現が低下したことから, RasはMETHによる急性効果に重要な関連を有すると考えられた。

13. てんかんにおける G protein-gated inward rectifier potassium channel (GIRK2) および3量体G蛋白質 $\beta \cdot \gamma$ サブユニットの変化について

宮城島大, 岩佐博人 (千大)
菊池周一 (国立精神保健研究所)
峯清一郎 (千大・脳外)
長谷川修司 (市環境保健研究所)

扁桃核キンドリングモデルと側頭葉てんかん症例の切除海馬で免疫染色を施行した。キンドリング全般発作後と切除海馬棘波出現部位で陽性細胞の増加を認め, GIRK2と $\gamma 3$ の, 発作発現及びてんかん原性獲得への関与が示唆された。